



# 国際交流



西尾林太郎 現代社会学部教授

1950年生まれ。早稲田大学大学院政治学研究所博士課程満期退学。1996年より愛知淑徳大学現代社会学部教授。専門は政治学。韓国、台湾、中国などアジア各地へ学生と共に出かけ、フィールドワークを通じて現地の社会、文化を学生に体験、理解させ、日本社会や近代日本に対する認識を深めさせることを教育課題としている。

**柳総領事** 学生にとっては先生から教えてもらう知識だけではなく、新聞に出ているような現実的な知識も併せた、バランスある知識が必要ではないかと思えます。だから西尾先生が私のような現場の外交官を呼んで授業をするのは、いいアイデアだと思います。

**西尾教授** 学生が、学問と現実に関心していることを一体として

**西尾教授** 総領事は、積極的にフィールドワークやフィールドスタ

**西尾教授** 互いを知るためには相手の国の言葉を学ぶのも大切



ユ・ジュヨル 柳洲烈 駐名古屋大韓民国総領事

1947年、韓国生まれ。韓国・ソウル大学(文理大・中国文学)、韓国・成均館大学(貿易大学院)、アメリカ・コロンビア大学(国際問題大学院)卒業。1977年、外務部入部。外交官として、アラブ首長国連邦、日本、中国、香港の大使館、領事館に勤務。2001年9月、駐名古屋大韓民国総領事館に総領事として着任。

**西尾教授** 総領事には昨年、本学の学園祭で講演をしていただいたのに続き、今年4月には私の日本政治外交史の授業でお話をさせていただきました。

**柳総領事** 私がコロンビア大学で外交学を勉強しているときには、ブラウンバックランチというクラスがありまして。大学に外交官を

**柳総領事** 本では分からないことを確認するために行くこともあります。中国では中国共産党の革命の聖地と言われる井冈山(せいこうざん)で、毛沢東が蒋介石に包囲されたが、どうして陥落しなかったのか不思議でした。

**西尾教授** 私は学生を連れて何度か韓国へ行っていますが、教科書問題などが原因で、学生は最初韓国全土が反日的な雰囲気にあると思っています。でも実際に行く

## 【対談】 日韓交流の現場から

# 相手の国を理解するには、実際に 行って現実を知ることが大切です

政治学が専門の現代社会学部の西尾教授と、母語の韓国語を始め、中国語、英語、日本語の4か国語に堪能な柳総領事が、日韓の交流やフィールドワーク、外交官の仕事などについて幅広く語り合いました。

### ブラウンバックランチ

**西尾教授** 総領事には昨年、本学の学園祭で講演をしていただいたのに続き、今年4月には私の日本政治外交史の授業でお話をさせていただきました。

**柳総領事** 学園祭で初めて愛知淑徳大学を訪問したのですが、大勢の学生がアジア、韓国に興味を持っていて感じました。

**西尾教授** 総領事は大学や自治体などで積極的に講演をしていらっしゃいます。総領事のように外交の中枢にいる方に日韓の歴史を語っていただくと、学生に対して非常

にフランスよく理解していくのは、非常に大切だと思います。

**柳総領事** 私がコロンビア大学で外交学を勉強しているときには、ブラウンバックランチというクラスがありまして。大学に外交官を

**西尾教授** それはいいアイデアですね。ビジネスマンなどいろいろな人に来てもらうのもいい。

**柳総領事** 講師として呼ばれると、自分の考えを整理したり、レジュメを作ったり、学生が今、何を考えているかを考えたりします。

### 歴史を知るために現地へ行く

**西尾教授** 総領事の外交官としてのお仕事について教えてください。

**柳総領事** 私は中国語ができたこともあって外務部(日本の外務省に相当)に入り、中国や日本などの大使館に勤務してきました。

**西尾教授** 総領事は、積極的にフィールドワークやフィールドスタ

ディをしていらっしゃいますね。

**柳総領事** 本では分からないことを確認するために行くこともあります。中国では中国共産党の革命の聖地と言われる井冈山(せいこうざん)で、毛沢東が蒋介石に包囲されたが、どうして陥落しなかったのか不思議でした。

**西尾教授** 日本ではどちらへ行かれましたか。

**柳総領事** 東京の大使館にいたとき、北は知床半島、南は鹿児島まで行きました。江戸末期、薩摩藩の藩士たちがどうしてあれだけの力を持ち得たのか、桜島から立ち上る煙を見て、分かるような気がしました。薩摩藩は幕府から命じられて木曾川の治水工事を行ったりしていましたから、わ

**西尾教授** その土地ならではの歴史や風土を知ること、歴史上の事件や今の人々の暮らしを理解できるということですね。

**柳総領事** そうです。私は、外交ではお互いの国に利益がないといけないと思っています。国同士が仲良くなるのが一番の選択ですから、相手の国が何を求めているかを知るには、その国の歴史を知らなければなりません。だから現場へ行って、そのとき歴史がどう動いたのかを(笑)、確認したいと

**西尾教授** 若い人が交流することが大切です。

**柳総領事** 韓日にはお互いに誤解があるのではないかと思います。親から聞いたこと、学校で学んだことは違う本当の姿を知ることが大切だと思います。

思っています。

### 草の根レベルの交流

**西尾教授** 私は学生を連れて何度か韓国へ行っていますが、教科書問題などが原因で、学生は最初韓国全土が反日的な雰囲気にあると思っています。でも実際に行く

**柳総領事** 草の根レベルの交流は大切だと思います。私の親戚にも、日本にホームステイに来たら、日本人は親切で、聞いていたのと違くと驚いていた人がいます。

昨年のワールドカップの韓日共同開催で、日本はベスト16でしたが韓国はベスト4まで残りました。一部の韓国の人は、日本は韓国に対してジェラシーを持つのではないかと

思いましたが、日本は積極的に韓国を応援してくれました。大会の運営も大成功でしたし、ワールドカップをきうがけに韓日関係はずいぶんよくなったのではないかと

思っています。

**西尾教授** 若い人が交流することが大切です。

**柳総領事** 韓日にはお互いに誤解があるのではないかと思います。親から聞いたこと、学校で学んだことは違う本当の姿を知ることが大切だと思います。

### ハングルは勉強しやすい言葉

**西尾教授** 互いを知るためには相手の国の言葉を学ぶのも大切

# 「淑徳に行くの？ よかったね！」



愛知淑徳高等学校 社会科教諭  
石黒克幸

私が淑徳に就職が決まった時、周りの人は皆こつこつと喜んでくれました。しかし、高校まで愛知県内の公立高校で過ごし、関東方面で大学生活を送った私にとって、想像の域にしかなかった「淑徳」で初めての教員生活を送ることは非常に不安で



名古屋大韓民国総領事館にて

ですね。  
**柳総領事** 最近、名古屋韓国学校で、韓国語、日本語、中国語を比較した「学びやすい韓国語」という特別講義を行いました。韓国語と日本語は同じ発音、意味の言葉が多いのです。というのも、両国の言葉の多くは中国の漢語の発音が起源だからです。カバンや短編、高速道路などはそのまま通じます。  
**西尾教授** 音は同じで表記がハングルだけなんです。ハングルは15世紀に李朝の世宗国王が作った言葉ですね。

**柳総領事** ハングルは表音文字です。韓国語は24のハングルさえ分かれば、ある程度は読めます。発音が同じ言葉も多いので、日本人には勉強しやすい言葉だと思います。ただし韓国語や中国語は子音で終わる言葉が多いのに対し、日本は母音で終わることが多いという違いがあります。  
**学生のための英語上達法**

**柳総領事** 一般的に日本人が英語が苦手と言われるのは、日本語が音韻構造上、複雑で微妙な発音が上手くてできないためだと思います。声帯、発声器官は中学生の頃には固まってしまうので、それから英語を学んでもネイティブのように話するのは難しい。しかし本人の努力次第で話せるようになるのではないのでしょうか。私の知人の通訳は、毎日2時間、声を出して英語の本を読んでいます。そのようにして、発声器官を鍛えているのです。  
私もアメリカ人と食事をする

ことになったら、その前に10分くらい程度、英語新聞を声に出して読みます。スポーツ選手がウォーミングアップするのと同じです。  
**西尾教授** 声を出すのは重要なですね。  
**柳総領事** 外交官は言葉が武器なので、どうしたら洗練された上手な言葉を使えるか、常に考えています。  
**西尾教授** 今日は貴重なお話をありがとうございました。是非、愛知淑徳大学へ講義に来ていただきたいと思っています。

した。  
初めの1年は驚きの連続でした。部活動はバドミントン部の顧問になりました。バドミントン部はインターハイに過去何度も出場したことがある部活で、生徒たちは毎日熱心に全力でシャトルを追いかけ、試合では常に好成績を挙げていました。また常に礼儀正しく、素振りさえ上手くて、できない私でもバドミントン部の生徒たちは顧問として扱ってくれました。部活動を通して心身ともに成長する生徒の姿に感心させられました。  
また、学園祭には全力をかける逞しい生徒たちの姿がありました。5月下旬から学園祭に向けて始動し、まずは展示・演劇・ミニシカレ音楽の4部門のうちどの部門をやりたいかを朝から授業後まで時間を見つけて話し合います。そして6月上旬の部門決定のくじ引きで一喜一憂し、それから3ヶ月も学園祭の準備に取り組みのです。  
校外から汗をかきながらたくさん階段

ボールを抱えて持ってくる姿、手足にまでペンキをつけながら装置を作る姿、「あめなほあかいな」と発声練習をする姿、ダンスを全体で合わせようとする姿などを毎日のように見かけました。中には希望とは違う部門になってしまったクラスや演じた役がもらえなかった生徒もいましたが、お互いに励まし合いつつ、自分たちの学園祭を成功させようとしていました。これこそ淑徳が伝統精神としている「淑徳魂」なのだと感じ取ることができました。  
文部科学省が出している「学習指導要領」では、自ら学び自ら考える力などの生きる力の育成が学校教育の基本的なねらいの一つとされています。そのためには各教科の学習も非常に大切です。授業中の熱心な眼差し、授業後にも職員室まで来て質問をする向学心、レポート課題において非常に難しいテーマ設定をして取り組んでいく探求心、生徒が多

くそれらによって私も生徒に負けられないように自己研鑽に励まなければならないと気を引き締められます。  
しかし、各教科の学習だけでは、生きる力、は身につくものではありません。部活動や学校行事などの様々な活動の中で体験を積み重ねていく上で培われていくものだと思います。淑徳の教育とは、「こつこつ」生きる力を育成する教育であると思っています。  
2005年平成17年で愛知淑徳学園は100周年を迎えます。記念事業の一つとして中学・高校新校舎の建設が行われ、それに伴った教育内容の見直しも進められています。その意味で淑徳は変わりつつあります。しかし、「淑徳に行くの？ よかったね！」と淑徳に関わるすべての人が言われるような学園であり続けられるように、創設以来の10年先、20年先に役立つ人材の育成」という教育方針のもとに私も尽力し、生徒と共に私もこの淑徳の中で人間としての成長を続けていきたいと思います。